コソボ難病の男児両親会見

高度な医療技術 医師らに感謝

金沢大医学部付属病院に入院し、産経新聞の「明美ちゃん基金」適用などで目の中にがんができる網膜芽細胞腫（もうまくがさいぼうしゅ）の治療を続けているユーゴスラビア・コソボ自治州のアルバニア系男児、ネジール・シニックちゃんの両親、アブドゥラマン・シニックさん(四〇)とヒュルメーテ・シニックさん(四〇)が二十六日、入院後初めて記者会見した。

ネジールちゃんは三月十九日にベオグラードの病院で右目の摘出手術を受け、いったん退院して四月二十日に再び入院する予定だった。しかし、NATOの空爆が激しくなり、検問で「ベオグラードにはアルバニア系住民の治療をする病院はない。帰れ」などと追い返され、病院へ行くことができなかったという。

アブドゥラマンさんによると、空爆が始まって三カ月ほどは「逃げて難民となればネジールちゃんの治療ができない」と思い、地下で生活した。しかし、AMDA（アジア医師連絡協議会）の上田明彦医師が緊急を要すると診断し、「もう治療は国外でしかできない」と決断。「医療水準の高い日本なら何もいうことはない」と、言葉や生活の不安などを全く考えずに日本行きを即断したという。

アブドゥラマンさんは「ベオグラードの医師の一人はすばらしかったが、看護婦は説明もしてくれず嫌がらせで注射をずらしてするなど、信用できなかった。日本は高度な医療技術があり、病院は親切で感謝している」。ヒュルメーテさんは「病院の医師に感謝したい。特に看護婦さんの対応には大変満足しています」と話した。